パワーオフ
POWER OFF
井上夢人
Inoue Yumehito

パワー・オフ

POWER OFF

Inoue Yumehito

井上夢人

初出――――――――――「小説すばる」
1994年8月号～1995年10月号

この作品はフィクションです。

パワー・オフ

著者――――――――――井上夢人（いのうえゆめひと）

1996年7月30日――――――第1刷発行

発行者――――――――――若菜正

発行所――――――――株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋2-5-10〒101-50
電話03-3230-6100（編集部）
3230-6393（販売部）
3230-6080（制作部）

印刷所――――――廣済堂印刷株式会社

製本所――ナショナル製本協同組合

著者との諒解により検印は廃止いたします。
定価は帯およびカバーに表示してあります。

© 1996 Yumehito Inoue, Printed in Japan
ISBN4-08-774199-0 C0093

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは法律で認められた場合を除き著作権の侵害となります。

パワー・オフ
POWER OFF

呪われた、呪われた創造者！　なぜ私は生きたのか？
なぜあの瞬間に、あなたが気まぐれに与えた存在の火花を消してしまわなかったのか？

――メアリ・ウォルストンクラフト・シェリー『フランケンシュタイン』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

プロローグ

直径十二ミリといえば、鉛筆よりもずっと太い。ちょっと太めの万年筆の軸ぐらいある。そんな太さの電動ドリルの刃が、松島良樹の左手ほぼ中央を、甲から掌へ向かって垂直に突き抜けていた。

堀江慎介は、良樹の正面に、作業台を間に置いて立っていた。だから、良樹の左手は、慎介の目の前にあった。

「あ、あ……」

と、良樹の喉からかすかな声がもれた。助けを求めるように、慎介のほうへ目を上げてきた。その良樹の顔は、信じられないぐらい真っ白だった。

目の前に見せられている光景が、慎介にはよく理解できなかった。ドリルの刃が、良樹の左手に……。

削り取られた骨と肉が、良樹の手の甲と固定テーブルの上に散乱している。人間の身体から飛び散ったもののようには思えなかった。慎介の目には、それがなんだか紅葉おろしか何かを振り撒いたように見えた。

どうして、ドリルが良樹の手に……。

はっとして、そのときようやく慎介は自分の周囲を見回した。第二班の全員が、良樹の左手を眺めていた。誰の顔にも表情がなかった。

「て、手が……」

良樹があえぐように言った。

突然、慎介の耳に、教室中の騒音が飛び込んできた。ほんの短い時間、何も聞こえなくなっていたことに、それで気づいた。

「や、やべえーっ！」

不意に、何かに打たれたような気持ちになって、慎介は叫んだ。良樹の左手を凝視したまま、大声で叫んだ。視線がそこから外せなくなっていた。

「やばいよぉ！」

また叫んだ。「やばい」という以外の言葉が出てこなかった。

実技教室にいるクラス全員が慎介たちの作業台を振り返った。

「堀江。なにを騒いでる！」
教室の前方から、田辺先生の声が返ってきた。
「先生！　松島が……どうするよ、やべえよ」
自分の身体がガタガタと震えていた。小便が漏れそうだった。クラス全員の私語が止んだ。
「どうしたんだ。堀江、お前の――」
生徒たちを押しのけながらやってきた田辺先生が、突然言葉を呑んだ。
その瞬間、まるでそれが合図だったかのように、電動ドリルの刃が、ギュン、と音を立てた。
「わあっ！」
いきなりドリルのヘッドが上昇し、刃が良樹の手から引き抜かれた。抜けると同時に、その傷口から血があふれ出した。まるで糸が切れたように、良樹は、すとん、と床に腰を落とした。
「おい、誰か……誰か、救急車を呼べ！」
田辺先生が、そう叫びながら床の良樹を抱え起こした。良樹は、身体を硬直させながら、伸ばした両足をバタバタと動かしていた。
教室中が大騒ぎになった。
流血を止めようとしているのか、田辺先生は良樹の左腕のつけ根をギュウギュウと握りしめていた。抱えられている良樹のほうは、ほとんど白目を剝いている。口から涎が垂れていた。
慎介は、身体の震えを止められなかった。床に良樹の血がたまっている。こんな恐ろしいものを見たのは生まれて初めてだった。小便がしたくてたまらない。
どうして……。
慎介は、床の上の先生と良樹を見おろしながら思った。
僕のせいじゃない。僕が悪いんじゃない。
――何か引っかかってんじゃないの？
そう言っただけだ。プログラムは、何度も確かめたんだから。プログラムの虫は、全部退治してあったんだから。
機械が、何かトラブルを起こしたんだ。それを言っただけだ。
――ちょっとドリル・ヘッドを見てくれよ。
まさか、良樹が固定テーブルの上に、それもドリルの刃の真下に手を置くなんて、そんなことするなんて、思わなかった。
僕が悪いんじゃない。
床の上で、田辺先生が何か叫んでいた。何を言ってい

るのか、慎介には理解できなかった。言葉の意味がよくわからない。トイレに行きたかった。
トレース・カーを仕上げなくちゃ……。
唐突に、慎介はそんなことを考えた。
こんなときに、どうしてそんなものが思い浮かんだのか、自分でもわからなかった。机の下の段ボール箱に収めてあるトレース・カー。
このところ、慎介はずっとトレース・カーにかかりきりだった。学校から帰ると、冷蔵庫や食器棚を漁り、菓子パンかソーセージにかぶりつきながら自分の部屋へ入る。カバンを放り出して、机の前に腰を下ろし、段ボール箱の中のトレース・カーを取り上げる。
作りはじめてから、もうそろそろ十日ぐらいになる。車輪とギヤの接合に何度か失敗して、思ったよりも時間がかかってしまった。
模造紙にフェルトペンで黒い道を描いてやると、センサーが働いてその道をトレースしながら走る車だ。文庫本ぐらいの大きさのアルミ板をシャーシにして、そこに後輪を駆動させるためのマブチモーターを二個、ギヤも二個、電池は単二、単三、そして九ボルト角形の三個を載せている。リレーだの、トランジスタだの、スイッチだのを配置して、しかし、最大の目玉は車の前に突き出した受光部だった。トレース・カーは地面から跳ね返ってくる光をセンサーが感知して、進む方向を変えるのだ。
まあ、工作の難易度はさほど高くないし、オモチャだと言われてしまえばその通りだけれど、でもこれもある種のロボットには違いない。
慎介は、小さいころからロボットにあこがれていた。複雑な動きをするロボットを自分で作りたいと、ずっとそれが夢だった。
だから、学校でも慎介が一番好きなのは実技の時間だった。友人たちの手前、授業が好きだなどとはみっともなくて言えないし、やってらんねえよ、とうそぶいてみせたりもするが、慎介の実力は誰もが認めていた。
二年の一学期に入ってまもなく始まった板金加工機械をコンピュータで制御するという実技授業も、そんな慎介にとっては楽しくて仕方がないものだった。実際、第二班の制御プログラムのほとんどは、慎介が一人で書いたのだ。
キーボードから、板金のどの位置に穴を開けるかをミリ単位の数値で入力する。コンピュータは、固定テーブルの上の板金をゴムローラで正確な位置にセットし、タ

イミング良く電動ドリルのヘッドを下降させる。
何度も行なったテストでは、なにもかもうまくいった。第二班のプログラムが一番だと、みんなが思っていた。
ところが、最終テストの最中に、いきなりドリルが停止してしまったのだ。プログラムの間違いであるはずはなかったから、ドリルの駆動部分にトラブルが発生したと判断した。
ただそれだけだ。良樹が刃の真下に手を置くなんて……僕のせいじゃない。
慎介は、またそう思った。思ってみても、身体の震えは止まってくれなかった。
トレース・カーを仕上げなくちゃ。あとはボディに色を塗るだけだ。もう、ほんの一時間か二時間程度で仕上がるはずなのだから。
「堀江、ちょっと……」
肘をつつかれて、慎介は痙攣を続けている床の良樹から目を上げた。山口駿一(やまぐちしゅんいち)が思いつめたような顔で慎介を見返した。
「なんか、へんだぜ、これ」
ささやくようにそう言いながら、駿一は作業台の端に載せられたパソコンを指差した。
「へんって、なにが？」
駿一が唾を呑み込んだ。そして小さく首を振った。
「今は……へんじゃないけどね、さっきなんかへんてこなウインドウが開いてたんだ」
「へんてこなウインドウ？」
慎介は、パソコンのディスプレイを見つめた。入力ボックス(ダイアログ)には、先ほど慎介が設定したときのデータがそのまま表示されていた。プログラムは待機状態を続けている。
「なに言ってんだよ、おまえ」
「だって……ほんとにそうだったんだから」
駿一が言ったとき、一瞬、ディスプレイの中の表示が揺らいだように見えた。
「あ――」
そして次の瞬間、画面の中央に奇妙なウインドウが出現した。
慎介は、ぽかんとして、そのディスプレイを眺めた。グラフィカルな画面に見慣れた目には、あまりにも愛想のない文字だけの表示。しかし、三十秒ほど見続けているうちに、その奇妙なウインドウは、出現したときと同様に、唐突に画面上から消え去った。何事もなかった

おきのどくさま
このシステムは
コンピュータ・ウィルスに
感染しています

ように、ディスプレイは元の状態に立ち戻った。
「……なんだ、これ」
慎介は、駿一を見返した。
「な？」
駿一が、青白い顔で言った。
慎介は教室を見渡した。誰かに何かを言ってほしかった。三十人以上いるクラスの誰もが、自分を責めているように感じた。
コンピュータ・ウィルス……？
誰かが保健室から担架を運んできた。担架に乗せられるとき、良樹はもう、ほとんど気を失っているように見えた。

1

エレベータを三階で降りたとたん、桜木満夫（さくらぎみつお）は二人の男に声をかけられた。片方がカメラを持っていた。

「ＪＡＭ（ジャム）－ＮＥＴ（ネット）の職員の方ですね？」

髪の長い、カメラを持っていないほうが桜木に訊いた。

「ええ……そうですが」

「コンピュータ・ウィルスのことは、もちろんご存知ですよね」

「……」

思わず、桜木はガラスドアの向こうに目をやった。受付カウンターの脇に竹内（たけうち）課長が立っていた。桜木と目が合うと、竹内は、だめだめというようにゆっくりと首を横に振ってみせた。

「ウィルスがＪＡＭ－ＮＥＴで発生してばらまかれているという噂があるんですが」

桜木は、言った男の顔を見返した。右頬に大きな黒子（ほくろ）が飛び出している。耳に被さった髪にフケが浮いていた。どこかの新聞か雑誌の記者なのだろう。たいした記者とは思えなかった。良識ある記者なら、パソコン通信ネットがコンピュータ・ウィルスをばらまいている、などという不用意な表現は使わない。

「まだ、なにもわかりませんよ」

桜木はドアのほうへ進みながら記者に答えた。その言葉は嘘ではなかった。

新潟のホテルのベッドで連絡を受けたのは、朝の六時前だ。一番の新幹線に飛び乗り、そのまま出社した。事情など、桜木自身にもつかめていない。

「ＪＡＭ－ＮＥＴでは、どんな対処をするんですか？」

ドアに手をかけながら、桜木は二人の記者を振り返った。

「ウィルスが発見されたとすれば、しかるべき対処をします」

「すればって、どういうことですか。発見されたわけでしょう？」

桜木は、大きく息を吐き出しながら記者たちを見比べた。

「現時点では、それがウチのホストコンピュータに侵入しているのか、あるいは単なる噂だけなのか、聞かされ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

たばかりでちゃんとしたことをつかんではいません。調査を進めている段階です」
言いながらドアを押した。続いて入って来ようとする記者たちを、手を上げて制した。
「今はまだ、申し上げることはなにもありません。今日のところはお引きとり下さい」
「いや」と長髪の記者は持っている手帳を振り上げた。「人が被害にあっているんですよ。これまでもウィルスが問題になったことはありますが、人がコンピュータ・ウィルスによって病院に運ばれたなんてことは、これが初めてです。こういう大変な事態を、当事者であるあなた方がどのように考えておられるのか、それを伺いたいんですよ」
なんだこの野郎は、という気持ちで桜木は相手を見返した。
「当事者という言葉を、どんな意味でおっしゃっているのか理解できませんが、申し上げたとおり、現在は調査中という段階なのです。まず私たちがしなければならないのは、早急に、ちゃんとした事実を把握することです。事実の把握ができていない段階では、なにもお答えできません」
質問を続けようとする記者に、桜木はくるりと背を向けた。受付カウンターの向こうのデスクで、峰原佐知子がこちらを眺めていた。合図すると、彼女はうなずいて椅子から立ち上がった。佐知子は、顔は可愛らしいが、百七十八センチ、七十八キロの巨体である。目の前に立たれると、たいていの人間はぎょっとして彼女を見上げる。肩幅が広く、腕もそこらの男よりは太い。佐知子は、その腕の太さを気にして、夏でも長袖のブラウスを着ている。
峰原佐知子はカウンターを回り、ドアのほうへ歩いてきた。記者たちはすでに経験済みなのだろう。彼女の姿を見ると、自分たちからドアの外へ出た。
「冷房の空気が逃げますので、失礼いたします」
そう言って佐知子は、にっこり笑いながら彼らの鼻先でドアを閉めた。
その様子を横目で見ながら、桜木は、先を歩きはじめた竹内課長の後ろを追った。
あの記者たちは、コンピュータ・ウィルスのことを、なにもわかっていない。いや、そもそも、それを正確に理解している記者というのが、日本にどれだけいるのだろうか。

ほんの数年前、コンピュータ・ウィルスについてのニュースがさかんに報じられていた最中、テレビ局に「ウチの息子がパソコンでゲームをやっているが、コンピュータ・ウィルスが息子に感染する危険はないのか」と問い合わせた主婦がいたそうだ。これは、業界の笑い話として記憶されている。しかし、笑えないのは、そのときのテレビ局側の応対だった。テレビ局は、その問い合わせにちゃんと答えられなかったのだ。「さあ……担当の者に聞かなければわかりません」と返答したというのである。

あの長髪の記者は、コンピュータ・ウィルスによって人間が病院に運ばれた、という理解の仕方をしている。テレビ局に問い合わせた主婦と、その認識はまるで変わらない。

コンピュータ・ウィルスは、ワープロやテレビゲームなどと同類のソフトウエアである。データ処理を実現するための手順書にすぎない。そのプログラムは、通常ディスクなどの外部記憶装置に収められていて、必要に応じてコンピュータのメモリに読み込まれる。つまり、コンピュータの内部だけに存在している符号の寄せ集めなのである。それが外へ飛び出すことなどあり得ない。

そんなソフトウエアが、それを使っている人間に何かの病気を感染したり怪我をさせたりするわけがないのだ。

長時間ディスプレイを見続けていたために視覚障害を起こしたり、ワープロを足の上に落として怪我をするようなことはあるかもしれないが、それはソフトウエアの責任ではない。

竹内課長に促されてミーティング・ルームへ入ると、湯村稔がノートパソコンから顔を上げた。

「思ったより早かったじゃん。飛行機？」

縁なしの眼鏡を鼻の上に押し上げながら、湯村は桜木に笑いかけた。桜木は竹内課長の後について椅子に腰を下ろしながら首を振った。

「新幹線。こんなトンボ返りになるんだったらホテルなんて取るんじゃなかったよ」

「どうだった？　新潟のハッカー騒ぎは」

「くだらないんだ。会社の広報誌にパスワードを載せちゃった奴がいてね」

湯村が、眼鏡の向こうの眼を瞬かせた。

「なんだい、そりゃあ？」

桜木は首をすくめた。

「それだけのことさ。豊栄物産というのが、ウチの法人

会員になっている。その会社が出している広報誌に〈パソコン通信の楽しみ〉とかって記事が載ってるわけね。そこにアクセスＩＤとパスワードが印刷してあった」
「なんで、また……」
「ＩＤは、必要な人数分……四十人分かな、それだけ渡してあるはずなのに、面倒くさがって、使われているのは、その中のたった四つだけだったんだ。ほとんどの人が一つのＩＤを共同で使っていたらしい。だってね、会社のパソコンを見せてもらったら、ごていねいなことに、ディスプレイの上にＩＤとパスワードが並べて書いて貼ってあるんだぜ。だから、広報誌に載せちゃうのも、連中にとってはなんでもないことだったらしいね」
「そりゃ、見る奴が見れば、それを使ってタダでアクセスしたくなるだろうな。どうぞみなさんでご自由にご利用下さい、てなもんだもの」
「ハッカーでもなんでもないのさ。そういうくだらないことで、いちいちこっちを呼ぶんだからね」
「セキュリティ意識なんて、皆無だな」
桜木はうなずきながら上着を脱いで椅子の背に引っかけた。
ＪＡＭ－ＮＥＴ事務局に新潟の豊栄物産からハッカーの疑いがあるという届け出がなされたのは、先週末のことである。先月分と先々月分の利用料金が、それまでの四倍近くに跳ね上がった。豊栄物産はその請求を怪しみ、ネットのアクセス記録を引き出してみた。すると、社員がだれも出社していないはずの休日にも、長時間のアクセスがなされていたのだ。
ハッカーだ、ということになって、セキュリティ担当者として桜木が現地へ出向くことになったのである。その結果は、拍子抜けするようなものだったというわけだ。
パソコン通信にアクセスするには、ＩＤとパスワードというものが必要である。ＩＤは会員がネットに登録する際、事務局から与えられる識別コードで、ＪＡＭ－ＮＥＴでは三桁のアルファベットと五桁の数字で表わされている。パスワードは、事務局が与えるものではなく、会員が自分で決める。アルファベットと数字を組み合わせ、八桁以内の暗証コードを作るのである。この二つが揃わなければネットワークの中に入れない。いわばネットに入るための〈鍵〉のようなものだ。
当然のことながら、同じＩＤとパスワードが使われたとすれば、ネットのホストコンピュータは、それを同一人物からのアクセスであると認識する。だから利用料金

の請求もそのＩＤの登録者になされる。
ＩＤとパスワードは、パソコン通信にとって最も重要なものの一つである。それらの管理は、利用者の責任においてなされなくてはならないのだ。ずさんな管理を事務局に押しつけられてはかなわない。
「で、どうなんだ？」と桜木は湯村の手元のノートパソコンに目をやった。「怪我人が出たって？」
「うん」湯村はため息をついた。「詳しいこと、聞いてない？」
「ああ、簡単な電話だけ。朝早くて、俺の頭もちゃんと回転してなかったしさ」
「高校生だ」とそれまで黙っていた竹内課長が言った。「甲府の高校二年生。授業中に事故で怪我をしたらしい」
「授業中？」
竹内はうなずき、持っていた紙挟みに目を落とした。
「山梨県立甲府富士見工業高校。怪我をした生徒は、松島良樹君という二年生」
「授業中って、どういう状況なんですか？　想像がつかないんですよ、コンピュータ・ウィルスで怪我をしたって言われても」
「もちろん、ウィルスが直接、というわけじゃない。怪我をする原因が、どうもコンピュータ・ウィルスにあったということらしい」
「どんな？」
「うむ」と、竹内はまた紙挟みに目をやった。「電子技術の実技授業だったらしいんだがね。コンピュータを使って機械を制御する課題があって、それをクラスがいくつかの班に分かれてやっていたんだな。金属の板にドリルで穴を開ける、その穴の位置をコンピュータで制御する。一般的に、工場とか、実際の現場では、こういった制御はＮＣという特殊言語を使うことが多いらしいんだが、この高校の授業では基本を理解させるために高級言語でプログラムを書かせているのだそうだ。その生徒たちが書いたプログラムを走らせて電動ドリルを作動させていた。そのテストの最中、突然、機械が停止した」
「……」
「生徒はドリル側の故障だろうと考えて、機械を点検した。その点検をしているときに、いきなりドリルが動き出し、生徒の一人の手に穴を開けた」
「つまり……」と桜木は、竹内と湯村を見比べた。「それは機械側の故障じゃなくて、コンピュータの？」
「見たほうが早い」

と、湯村がノートパソコンを桜木のほうへ向けた。
「……」
パソコンの液晶ディスプレイには、なんの変哲もないワープロの入力画面が映し出されていた。湯村が書き込んだものだろう、画面の上に、

ウィルス、出てこい。
俺が相手になってやる。

と表示されていた。
「これがなんだ？」
「なんてことないように見えるだろ？　でも、これでウィルスはすでに稼働中なんだ。これは新種だね。今までお目にかかったことのないタイプだ」
「稼働中って、しかし」
と、桜木はパソコンを手前に引き寄せた。ためしにキーを叩いてみる。

峰原佐知子は、悪い記者を退治しました。

打って、湯村を見返した。
「なんでもないぜ」
「もっと続けて打っててみな」
「……」
肩をすくめ、桜木はまたキーを叩いた。

佐知子ちゃんは

その後に続けて「強い」と打とうとしたが、突然、画面の中央に小さなウインドウが現われた。
桜木は、そのウインドウに表示されているメッセージを凝視した。（次頁・画面）
現われたメッセージは、二十秒ほどで消えた。そして、また先ほどのワープロ画面に戻った。
「……」
ためしに、前の文字に続けて「強い」と打ち込んでみる。入力した文字が、そのまま画面に表示された。
「ようするに」と、湯村がタバコに火をつけながら言う。「この新型ウィルスは〈常駐型〉なんだ。解析がまだで、断言はできないけど、こいつはコンピュータを無反応化させてしまうとか、データを破壊するとか、そういう悪さはやらないようだ。おそらく、そのとき稼働して

おきのどくさま
このシステムは
コンピュータ・ウィルスに
感染しています

いるソフトには、ほとんど影響を与えないんじゃないかと思うね。そういう意味では、良心的なウィルスというか……。ただ、定期的に、あるいは何かのタイミングで、さっきのウインドウを開いてメッセージを表示する。表示している間は、キー入力もなにも受けつけないが、一定の時間が過ぎると、何事もなかったように元のソフトを復活させる」

「つまり」と、桜木はノートパソコンの画面を指先で叩いた。「冗談(ジョーク)ウィルスの一種だというわけか？」

「そうね。作った奴は、なんの罪の意識も持ってないだろうな。データを壊すわけじゃないし、ちょっとびっくりさせてやるだけだ。まあ、笑って許せ、とね」

「しかし、事故が起こった」

うむ、と湯村がうなずいた。溜息のようなものを吐き出しながら竹内が首を振った。

「ようするに、電動ドリルの作動中にウィルスが機械を停めたんだ。機械を制御しているプログラムを停止させたわけだな。それを、生徒たちは機械の故障だと思って点検をはじめた。今見たように、ウィルスは一定時間を経過するとメッセージの表示をやめる。同時に元のプログラムが復帰する。だからドリルは運転を再開する」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.